学位請求論文審査報告要旨

2013 年 2 月 13 日

申請者　　崔 栄殊
論文題目　韓日テンス・アスペクト形式の意味と使用条件

論文審査委員　　イ　ヨンスク
庵　功雄
井上　優

１．本論文の内容と構成

本論文は、日本語の「タ」、韓国語の「-ess-」（었：いわゆる過去形：ローマ字表記は Yale 式による）、「-ess-ess-」（었었：いわゆる大過去形）の三形式とこれらと意味的に対立する文法形式（非過去形・継続形）とが文脈の中で使い分けられるメカニズムについて詳細に観察・分析することを通じて、日本語・韓国語のテンス・アスペクト体系の本質的な相違の一端を明らかにすることを試みたものである。

日本語・韓国語のテンス・アスペクトの研究の歴史は長く、日韓対照研究も少なからずおこなわれている。しかし、従来の研究はテンス・アスペクト形式の選択に関わる文脈的要因に対する目配り、個々のテンス・アスペクト形式が文脈の中で使用された場合の具体的な意味の把握が必ずしも十分とは言えない。日本語・韓国語のテンス・アスペクト体系の基本的な部分はよく似ているが、「どのような文脈でどのような形式が用いられるか」という点は異なる点が少なくない。日本語・韓国語のテンス・アスペクト体系の本質的な類似と相違を明らかにするには、テンス・アスペクト形式の文脈の中での使い分けを詳細に観察した上で一般化をおこなう必要がある。本論文は、このような問題意識に基づき、多様な用法を有し、先行研究でも考察対象とされることが多い「タ」「-ess-」「-ess-ess-」の基本的意味と文脈上の使用条件について考察することを通じて、日韓両言語のテンス・アスペクト体系の本質的な相違の一端を明らかにしようとするものである。

以下は本論文の構成である。

第 1 章　序論
　1.1　本論文の目的
　1.2　韓国語のテンス・アスペクトの体系概説
　1.3　本論文で扱う問題
　1.4　先行研究概説
　1.5　本章のまとめと本論文の構成
第 2 章　日本語と韓国語の過去形のムード用法の使用条件
　2.1　韓国語の過去形のムード用法の使用条件

2.2　日本語の過去形のムード用法の使用条件
2.3　日本語と韓国語の過去形のムード用法の使用条件
2.4　まとめ
第 3 章　結果経験状況における日本語と韓国語の過去を表すテンス形式の使用原理
3.1　結果経験状況における韓国語の -ess- と -e iss- の比較
3.2　結果経験状況における日本語「タ」と韓国語の -ess-
3.3　まとめ
第 4 章　韓国語の大過去形式 -ess-ess- と日本語の対応形式
4.1　-ess-ess- の意味と用法
4.2　-ess-ess- に対応する日本語の表現
第 5 章　結語
5.1　まとめ
5.2　日本語教育・韓国語教育への応用の可能性
参考文献

２．本論文の概要

本論文は全 5 章からなる。

第 1 章では、本研究の目的、基本方針、本論文で扱う現象、先行研究について述べられる。具体的には、韓国語のテンス・アスペクトの体系を日本語と対照する形で概観した上で、「『タ』『-ess-』『-ess-ess-』が持つ固有の意味はただ一つである」という立場から分析をおこなうという本論文の基本方針が述べられる。そして、次の三つの現象が本論文の考察対象となることを述べた上で、日本語のテンス・アスペクト研究、韓国語のテンス・アスペクト研究、テンス・アスペクトの日韓対照研究の主要な研究が紹介される。

Ⅰ　状態や動作の存在を発見した文脈における過去形「タ／ -ess-」と非過去形の使い分け

Ⅱ　変化の結果状態を知覚した文脈（結果経験状況）における完成相過去形「タ／-ess-」と結果状態相現在形「テイル／-e iss-」の使い分け

Ⅲ　韓国語の大過去形「-ess-ess-」の意味用法

第 2 章は、状態や動作の存在を発見した文脈で「タ／ -ess-」が用いられる現象（「タ／ -ess-」の発見用法）に関する日韓対照研究である。例１：「（探し物を見つけて）あった！／iss-ess-ta！（あった）」、例２：「（バスが来るのを見て）来た！／wass-ta！（来た）」。

具体的には、①日本語の発見用法の「タ」は、探索の結果、対象が知覚されていない状態から対象が知覚されている状態に変化した場合に用いられること、そして、②韓国語の発見用法の「-ess-」は、「本当は～だった／やはり～だった」というように、話し手が発話時以前の知識を修正・更新する場合に用いられることが、豊富な例文とともに論じられる。また、発見用法においても「タ／-ess-」の基本的意味は「過去」であることに変わりなく、発見用法の「タ」と「-ess-」の違いは、日本語の「タ」は「知覚」状態の叙述に関

わり、韓国語の「-ess-」は「知識」状態の叙述に関わるという違いから生ずることが主張される。

本章で扱われている現象については井上・生越(1997)で考察がなされており、本論文においても井上・生越(1997)の考察が踏襲されているが、本論文では井上・生越(1997)の主張をさらに一歩進めて、「知覚」と「知識」に関する一般的なモデルを用いて説明をおこなうところに新規性が認められる。

第 3 章は，変化の結果状態を知覚した文脈（結果経験状況）における完成相過去形「タ」「-ess-」と結果状態相現在形「テイル」「-e iss-」（ている）の使い分けに関する日韓対照研究である。例１：「（相手のハンカチが相手の足元に落ちているのを見て）ハンカチが落ちました／ttelecyess-eyo（落ちました）」、例２：「（道にお金が落ちているのを見て）お金が落ちている／??落ちた／ttelecye iss-ta（落ちている）／ttelecyess-ta（落ちた）」、例３：「（聞き手の社会の窓が開いているのを見て）開いている／??開いた／??yelye iss-ta（開いている）／yelyess-ta（開いた）」。

具体的には，次のことが豊富な例文とともに論じられている。①日本語の場合，変化の結果状態に接した文脈で「テイル」ではなく「タ」を用いるためには、変化の過程を何らかの形で把握している必要があり、そうでなければ「テイル」が用いられる。②韓国語では、変化の過程を直接的・間接的に把握していなくても、「こういうことは起こりえない→こういうことが起こりうる」という話し手知識の修正が誘発された場合は、「-e iss-」（ている）ではなく「-ess-」を用いなければならない。

本章で扱われている現象自体は先行研究において断片的に指摘されているが、現象に対してまとまった分析をおこない、「知覚」「知識」という観点から明確な説明を与えたのは、本章の元になった崔栄殊(2010)「『結果状態』を表す韓国語の-었-と-어 있-の使い分け」（朝鮮語研究会『朝鮮語研究 4』所収）が最初である。また、ここでの主張は基本的に妥当であり、日本語と韓国語のテンス・アスペクトについて考える際には必ず参照すべき内容を含んでいる。

第 4 章は、韓国語の大過去形「-ess-ess-」の意味に関する考察である。具体的には本論文では「-ess-ess-」の用法を「知識修正用法」（過去のある時点の判断が誤りであったことを述べる）、「断絶用法」（過去のある時点の状況が現在の状況からすると意外な状況であったことを述べる）、「回想用法」（過去のある時点の状況がその時点で意外な状況であったことを述べる）の三つに整理した上で、これらを一般化する形で、「-ess-ess-」の意味を「出来事が過去の設定時より以前に成立しているという評価が発話時に成立することを表す」とまとめている。あわせて、「-ess-ess-」に対応する日本語表現についても考察をおこない、上記の三つの用法ごとに表現の対応関係に一定の傾向性が見られることを指摘している。

「-ess-ess-」の意味は「現在から切り離された過去」という形で説明されることが多いが、本論文の説明はこの説明よりも格段に具体的であり、韓国語教育においても応用可能な部分がある。また、「-ess-ess-」に対応する日本語表現に関する考察は、今後の対照研究のための重要なヒントを提供している。

第 5 章は、第 2 章から第 4 章までの内容がまとめられるとととともに、日本語母語話者に対する韓国語教育，および韓国語母語話者に対する日本語教育においては、本論文で論じられた日本語と韓国語の相違を十分に考慮する必要があることが述べられている。

３．本論文の成果と問題点

本論文においては、二つの重要な成果が得られている。

第一の成果は、韓国語のテンス・アスペクトにおいて「話し手知識が修正・更新されたことを述べる」ということが本質的に重要な意味を持つことを明らかにしたことである。

本論文第 2 章で扱われている韓国語の発見用法の「-ess-」については，「（これまでは～ｐと思っていたが）本当はｐだった」、「（これまでもｐではないかと思っていたが）やはりｐだった」という「話し手知識の修正・更新」を表すことが，井上・生越(1997)ですでに指摘されている（ただし，本論文では井上・生越(1997)よりも精緻な意味記述が試みられている）。しかし、「話し手知識の修正・更新」ということが、第 3 章で扱われている変化の結果状態に接した文脈での「-ess-」の使用にも深く関わっていることを指摘したのは、第 3 章の元となっている前述の崔栄殊(2010)が最初である。

本論文で述べられているように、日本語の発見用法の「タ」は、探索の結果、対象が知覚されていない状態から対象が知覚されている状態に変化した場合に用いられるが、韓国語の発見用法の「-ess-」は、「本当はここだった／やはりここだった」という発話時以前の話し手知識の修正・更新が生じた場合に用いられる。また、日本語において変化の結果状態に接した文脈で「テイル」ではなく「タ」を用いるためには、変化の過程そのものを何らかの形で把握している必要があるが、韓国語において同じ文脈で -e iss-（テイル）ではなく-ess-（タ）を用いるためには、「こういう変化は起こりえない→こういう変化が起こりうる」という話し手の知識の修正を誘発するような状況である必要がある。この二つの現象には、日本語の「タ」は「知覚」の叙述、韓国語の「-ess-」は「知識」の叙述に関わる、という平行性を見出すことができるが、これは先行研究ではまったく指摘されていない新しい知見である。日本語と韓国語の対照研究は多いが、複数の現象の根底にある本質的な相違を見出そうとする研究は意外に少ない。その意味で、韓国語のテンス・アスペクトにおいて「話し手知識の修正・更新」が本質的に重要な意味を持つことを見出したことの意義は大きい。

本論文の第二の成果は、「現在と切り離された過去」という形で説明されることが多い韓国語の「-ess-ess-」の意味を、文脈的要因も考慮に入れて、従来よりも格段に具体的に記述したことである。本論文の説明は韓国語教育に応用可能であるが、文法論的にも、本論文で言う「-ess-ess-」の三つの用法の意味記述はいずれも「話し手知識の修正・更新」と密接な関連づけを有する形でなされており、このことは韓国語のテンス・アスペクトにおいて「話し手知識の修正・更新」が本質的に重要な意味を持つという本論文の主張を補強するものである。

本論文で得られたこれらの成果は、言語表現の意味に関する鋭敏な語感と、個々の例文に対する内省を一般性の高い形でとらえなおす文法的センスがなければ得られないものである。上記の二つの成果は著者の言語研究者としての資質を明確に示すものと言える。

このように高く評価できる点を含む本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一に、本論文の題目は「韓日テンス・アスペクト形式の意味と使用条件」であるが、実質的な分析対象は「タ」「-ess-」の特定の用法と「-ess-ess-」のみである。本論文が従来深い分析がおこなわれていない現象について深い分析をおこない、日本語・韓国語のテンス・アスペクト研究の空白部分を埋めることに主眼を置いた研究であることは理解できるが、テンス・アスペクトという高度に体系的な領域を研究対象とする以上は、本論文の分析が日本語・韓国語のテンス・アスペクトの全体像について考える上でどのような意義を持つかについて、著者の見通しをもう少し開示してほしかったところである。

第二に、本論文において、著者は具体的な文脈の中での「タ」「-ess-」「-ess-ess-」の意味やニュアンスをかなり具体的にとらえており、そのことは例文提示における発話場面の状況設定のきめ細かさを見てもよくわかるが、意味記述に関して「形式化」を意識しすぎたきらいがあり、論文全体を通じて意味記述の抽象度が必要以上に高く、著者がとらえている意味やニュアンスが読み手にストレートに伝わりにくいところがある。本論文において著者がとらえていることがらの中には、理論的枠組みに関係なくテンス・アスペクトの研究者の共通認識とすべきことがら、あるいは韓国語教育に反映させるべき点も少なくないので、現段階ではあえて直感的な説明の段階にとどめるという選択肢もあったのではないかと思う。

しかし、これらの問題点は本論文で得られた知見の価値を損なうものではない。上記の問題点については、著者も解決すべき課題として認識しており、今後の研究の中で解答が示されていくことが期待される。

４．結論

以上から、本論文は学位論文としての水準に達しており，著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終審査結果の要旨

論文審査委員　　イ　ヨンスク
庵　功雄
井上　優

2013 年 1 月 22 日、学位請求論文提出者、崔栄殊氏の論文「韓日テンス・アスペクト形式の意味と使用条件」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、崔栄殊氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、崔栄殊氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。